

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520019

研究課題名（和文）「自然」と翻訳される諸概念間の差異に関する哲学的研究

研究課題名（英文）Philosophical study on the words translated as "nature(sizen)".

研究代表者

山岡 悦郎（YAMAOKA ETSURO）

三重大学・人文学部・特任教授

研究者番号：90115741

研究成果の概要（和文）：西洋古代、中世哲学の領域では、プラトン、アリストテレス、トマスにおいて「自然」という語がどのような意味で用いられているかを検討した。それをふまえて、西洋近代哲学において「自然法」の概念がいかに確立されてきたかを跡づけた。現代哲学に関しては、分析的倫理学における「自然主義」批判は、規範的倫理学との関連でどのような意義をもつかを考察した。東洋思想については、『維摩経』や『老子』などにおける「自然」という語の用例を検討するとともに、日本思想における「自然」の意味の変遷をたどった。

研究成果の概要（英文）：In the field of ancient and medieval philosophy, we considered the meaning of the word "physis", "natura" in Plato, Aristotle and Thomas. Based on it, we traced the concept of "the law of nature" in early-modern philosophy. Concerning the modern philosophy, we considered significance of the criticism of "naturalism" in analytic ethics in relation to normative ethics. About Eastern philosophy, we examined the usage of the word "sizen" in "Vimalakirti-nirdesasutra" and "Laozi" and traced the change of the meaning of "sizen (jinen)" in the Japanese thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：西洋現代哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：自然、哲学、比較思想

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成16年度～平成18年度に本研究の研究代表者は、「「有限性」理解の諸相とその

哲学的基础付けに関する研究」(科学研究費補助金・基盤研究(C))の研究代表者として、研究の総括を行ってきた。その研究は、「有限と無限」をめぐる問いの形を、西洋と東洋の思想のなかで、古代から現代にわたり跡づけようとするものであった。しかしこの研究を進める過程で、「有限」「無限」という概念が展開される基盤としての意義をもつ「自然」と翻訳される諸概念は、そもそもどのような内実を含んでいるのかという問題が浮かび上がってきた。

(2) 一般に「自然」と翻訳される言葉(physis,natura,nature)は、西洋において、「素材」「生成」「本質・本性」「物質」など多様な意味の広がりをもっている。他方日本においては、「自然」という言葉は、明治のある時期から nature の翻訳語として採用されてきたものであるが、そこでは、西欧思想の展開を背景に、「人為と自然」という対立の図式が前提とされることが多かった。しかし、中国において「自然」という言葉は、西欧の「自然」とは直接関わりをもたない空間と時間の中で独自の展開を遂げてきた。そして、主に仏教とともに伝来した「自然」は、日本においては「ジネン」として、新たな思想史的展開を遂げることにもなっていく。

以上のような事実をふまえると、一般に「自然」と翻訳される言葉が、それぞれの地域、時代、あるいは個々の哲学者において、さらには哲学者のそれぞれの著作のなかで、どのようなことを指し示すものとして用いられているかを、一つひとつ検討することの重要性があらためて浮かび上がってくる。

2. 研究の目的

(1)本研究は以上のような問題意識を背景にして、これまでこの研究グループが行ってきた比較思想的研究を、さらに発展させようとするものである。

(2)この研究が目指すのは、より具体的には次の二点である。

①本研究に関連する代表的な先行研究としては、以下のようなものを挙げることができる。Heinemann,F.,*Nomos und Physis*,1945;Collingwood,R.G.,*The Idea of Nature*,1945;Finnis,J.,*Natural Law and Natural Rights*,1980;上智大学中世思想研究所編『古代の自然観』1989;同研究所編『中世の自然観』1991;金倉圓照『インドの自然哲学』1971;相良亨「『自然』という言葉をめぐる考え方について」1979;源了圓「日本人の自然観」1985;福永光司「中国の自然観」1985;Yuyama,A.(ed.)*,Buddhism and Nature*,1991;柳父章『翻訳の思想 「自然」

と nature』1977.これらの研究は、当該の分野における重要な業績として、今日でもその価値を失ってはいない。しかし、これらの研究が引用し、解釈を施している個々のテキストをあらためて検討してみると、現在ではその理解に疑問が生ずる点もあることは否定できない。そこで本研究ではまず、こうした従来の研究による個々のテキスト解釈の疑問視される点を、各研究者があらためて吟味し、適宜修正案を提示することを目指す。

②そのうえで、そうした個別研究において得られた成果を個々の研究者が研究会において発表する。そのことによって、西洋思想、東洋思想、日本思想の研究者が互いの知見を共有しながら共同で「自然」概念を再検討し、これまでの哲学研究における「自然」理解を進展させる。これが第二の目的である。

3. 研究の方法

比較思想的な視点に立って「自然」の概念を検討するという本研究の性格上、歴史学などの研究者にも広く協力を仰ぎ、研究体制を組織した。具体的には、次のような研究方法をとる。

(1)月に1回をめぐりに三重大学において定例研究会を開催し、研究代表者あるいは各研究分担者のうち毎回1名が、それぞれの専門領域の立場から、研究分担課題における「自然」理解の特質について個別の研究報告を行い、その知見を共同研究者全員で共有する。同時に、質疑や討論を通じて問題の所在を明らかにすることに努める。

(2)(1)の個別課題研究に関する討議で得られた知見をもとに、個別研究の領域を超えた「自然」概念のより包括的・原理的な考察を通じて、全体を俯瞰し統合する視点の形成を目指す。

(3)以上をふまえて、包括的・原理的な考察の結果得られた研究成果を再び個々の研究者の個別問題領域へフィードバックさせる。そのことを通じて、全体を俯瞰し統合する視点を個別に検証し、それまで行ってきた「自然」と翻訳される諸概念の考察をまとめる。

4. 研究成果

主な研究成果は、以下の四点にまとめられる。

(1) 西洋古代・中世哲学

まず西洋古代哲学の領域では、プラトン『パイドン』において、いわゆる「自然学者」の説が批判されている議論の意義を検討した。そこでは、血液、空気、骨、肉などの物

質的なものを世界の成立の原因と見なす立場が批判されている。その議論の展開を吟味することにより、人間を取り巻く「自然」と人間の双方に当てはまる包括的な原理を、善との連関で探求することが当時のギリシア人の一つの傾向であったことが示された。

次に、アリストテレスにおいて「自然 (physis)」は、事物・生物の「生成」、「素材・質料」、「本質」などの意味をもつことが示された。またそれをふまえて、中世のトマスの倫理においては、徳は人間の「本性の自己実現」だとされるが、それはアリストテレスの「自然」理解を継承したものであることが明らかにされた。

(2) 西洋近代・現代哲学

西洋近代哲学においては、「自然法」の概念が検討された。西洋古代から中世において「自然法」の概念がどのように確立されてきたかをふまえたうえで、それが近代にいたってどのように展開されたかを検討することを通して、各時代における「自然」と価値秩序の関係の特質を明らかにした。

また現代哲学の領域では、分析的倫理学における「自然主義」批判の展開を念頭に置きながら、メタ倫理学と規範的倫理学の関係について検討された。

(3) 東洋思想・日本思想

インド哲学・仏教学においては、『維摩経』で「自然」と翻訳されている言葉は、サンスクリット語では「本来の性質」「優れた様態」「出現する」「それ自身で存在する」「完全に」など、様々な意味に対応していることが明らかにされた。中国哲学に関しては、『老子』などの中国古代の文献において、「自然」は「自分自身で…する」という意味をもつにすぎず、日本語の「自然」とは意味合いが大きく異なることを示した。日本思想の分野では、「自然」という言葉は、もともと「おのずからそうなるさま」を表すために主に副詞的に用いられていたが、時代が下るにつれて「事物そのもの」を指すようになっていくことが、親鸞、正徹、山鹿素行、志賀直哉などのテキストに即して跡づけられた。

(4) 研究成果の刊行

以上の個別研究の成果は、ほぼ月に1回のペースで行われた研究会における吟味・検討をふまえて得られたものであるが、これらの成果を集大成して、論集『自然の探究』(片倉望編、三重大学出版会)にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 29 件)

1) 今泉智之、「倫理学の基層—古代ギリシアからの問い」、篠澤和久・馬渕浩二編『倫理学の地図』(ナカニシヤ出版)、査読無、pp.207-236,2010.

2) 山岡悦郎、「決定不能命題の哲学」、『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)、第 26 号、査読無、pp.125-132,2009.

3) 小川真里子、「科学における訳語「自然」をめぐって」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.15-29,2009.

4) 片倉望、「中国古代における「自然」」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.121-136,2009.

5) 遠山敦、「「おのずから」としての自然」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.111-120,2009.

6) 秋元ひろと、「自然と世界の価値秩序—自然法論をめぐって」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.1-13,2009.

7) 今泉智之、「「自然」と人間—ギリシア思想の一側面」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.71-83,2009.

8) 久間泰賢、「『維摩経』における「自然」」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.137-148,2009.

9) 桑原直己、「トマス・アクィナスと「自然本性natura」」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.85-96,2009.

10) 斎藤明、「仏教における行為と自然環境」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、査読無、pp.149-158,2009.

11) 山岡悦郎、「メタ倫理学と規範的倫理学」、『論集』(三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室)、第 13 号、査読無、pp.30-39,2008.

12) 小川真里子、「イギリスにおけるレビュー『農学と生理学に应用する有機化学』の受容」、『化学史研究』第 35 巻第 4 号、査読有、pp. 189-209, 2008.

13) 片倉望、「『春秋繁露』の自然」、『論集』(三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室) 第 13 号、査読無、pp.101-120,2008.

14) 遠山敦、「丸山真男と仏教」、『論集』(三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室) 第 13 号、査読無、pp.121-146,2008.

15) 秋元ひろと、「自然状態・政治状態とヨーロッパ政治思想の伝統」、『論集』(三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室) 第 13 号、査読無、pp.56-68,2008.

16) 今泉智之、「『パイドン』における自然学

説の批判」、『論集』（三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室）第13号、査読無、pp.69-90,2008.

〔学会発表〕（計5件）

1) 今泉智之「アリストテレスの『パイドン』批判」, 三重哲学会, 2009年7月4日, 三重大学.

2) 藤田伸也「山水画は自然を描いているか—中国絵画が描くもの—」, 三重哲学会, 2009年7月4日, 三重大学.

3) 山岡悦郎「カリーのパラドックス」, 三重哲学会, 2008年7月12日, 三重大学.

4) 森脇由美子「19世紀アメリカの人種と階級—ブラックフェイス・ミンストレルに見る人種意識—」, 三重哲学会, 2008年7月12日, 三重大学.

5) 久間泰賢「ダルマキールティにおける外界存在の認識について」, 三重哲学会, 2007年7月7日, 三重大学.

〔図書〕（計3件）

1) 酒井潔, 佐々木能章編『ライブニッツを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2009, 270頁.

2) 片倉望編『自然の探究』, 三重大学出版会, 2009, 171頁.

3) 桑原直己『東西修道靈性の歴史—愛に捉えられた人々—』, 知泉書館, 2008, 301頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山岡悦郎 (YAMAOKA ETSURO)
三重大学・人文学部・特任教授
研究者番号: 90115741

(2) 研究分担者

伊東祐之 (ITO SUKEYUKI)
三重大学・人文学部・非常勤講師
研究者番号: 50011359

小川眞里子 (OGAWA MARIKO)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 00185513

片倉望 (KATAKURA NOZOMU)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 70194769

遠山敦 (TOOYAMA ATSUSHI)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 70212066

秋元ひろと (AKIMOTO HIROTO)
三重大学・教育学部・教授
研究者番号: 80242923

今泉智之 (IMAIZUMI TOMOYUKI)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 30322978

久間泰賢 (KYUMA TAIKEN)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号: 60324498

藤田伸也 (FUJITA SHINYA)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 20283509

森脇由美子 (MORIWAKI YUMIKO)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号: 10314105

桑原直己 (KUWABARA NAOKI)
筑波大学・人文社会科学研究所・教授
研究者番号: 20178156

(3) 連携研究者

斎藤明 (SAITO AKIRA)
東京大学・人文社会系研究所・教授
研究者番号: 80170489

佐々木能章 (SASAKI YOSHIAKI)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号: 00144220